

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2022

課題番号：21K12923

研究課題名(和文)荒地派の未発表作品収集及びその歴史的意義の解明に関する研究

研究課題名(英文) Study on the collection of unpublished works of Arechi (Waste Land) poetry group and the elucidation of their historical significance

研究代表者

山下 洪文 (YAMASHITA, Kobun)

日本大学・芸術学部・助教

研究者番号：50886372

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：荒地派の詩と思想を解明するため、日本大学芸術学部(日藝)の卒業生・学生を集めて「実存文学研究会」を結成した。中桐雅夫・菅谷規矩雄・飯島宗享・鈴木喜緑らの足跡を私たちは辿り、未発表資料を発見し、翻刻した。また、その歴史的意義を明らかにする論文・創作を執筆した。これらをまとめたものが、『実存文学』『実存文学』(山下洪文監修、2022～2023年、未知谷)である。第一巻が776頁、第二巻が768頁の大著となった。その他戦後詩に関する数々の論文を執筆し、荒地派の歴史的意義はいまや明らかにされたと言っている。以上のように、本研究は日本文学史の新たな側面を照らし出し、その前進に寄与している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、戦後詩の未発表資料を翻刻・研究することで、戦後文学・哲学の未知の側面を照らし出した。飯島宗享がひそかに書き継いだ小説も、鈴木喜緑の晩年も、菅谷規矩雄が上演を熱望した劇も、中桐雅夫の戦時の動向も、本研究をとおして初めて明らかになった。戦後文学の貴重な資料を散逸する前にまとめたこと、それを考究する論考・創作を学生とともに執筆したこと、それらを書籍として歴史に刻印したことは、学術的意義を有するのみならず、社会的意義をも広く主張しようと確信する。焼け跡からすべてを始めようとした荒地派の営為は、確実性なき時代を生きる私たちに、深い暗示を与えている。そのことを、本研究は証明したのである。

研究成果の概要(英文)：I organized some graduates and students of the College of Art at Nihon University for the purpose of elucidating the poetries and thoughts of Arechi (Waste Land) poetry group, to form 'Association for Studying Existential Literature'. We have researched the lives and works of Masao NAKAGIRI, Kikuo SUGAYA, Kiroku SUZUKI, Munetaka IHJIMA, and others, discovered unpublished works, and reprinted them. We have also written articles and works that make itself importance and significance in the poetry history. These were compiled into "Existential Literature" and "Existential Literature II" (supervised by Kobun YAMASHITA, 2022-2023, Michitani,). Volume I was 776 bulky pages and Volume II was 768 bulky pages. I have also written a number of articles on postwar poetry, I would say that the historical significance of Arechi (Waste Land) has been made clear at last. As being described above, this study has shed light on new aspects of Japanese literary history and contributed to its advancement.

研究分野：戦後詩

キーワード：荒地派 中桐雅夫 菅谷規矩雄 飯島宗享 鈴木喜緑 未発表資料 実存主義 戦後文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、戦後詩の流れを決定づけた荒地派の詩人たちの単行本未収録作品・論文を調査し、その隠された一面を明らかにするために開始された。

その背景として、二冊の書籍の存在があった。荒地派の詩人・木原孝一の単行本未収録作品を調査し、未発表の遺稿を文字に起こし、それらを解説する論文を付した『血のいろの降る雪 木原孝一アンソロジー』(2017年5月、未知谷)と、『荒地』初期同人七名 鮎川信夫・北村太郎・木原孝一・黒田三郎・田村隆一・中桐雅夫・三好豊一郎 と『荒地詩集 1954』からの同人である吉本隆明の全営為を調査した『よみがえる荒地 戦後詩・歴史の彼方・美の終局』(2020年6月、未知谷)である。

両著の編纂過程において、単行本・全集未収録の荒地派の文章が、思いの外多いことが判明した。そのため、読解の道すじも制限されかねないことが危惧された。

たとえば中桐雅夫は、戦時中に『海軍の父 山本五十六元帥』を書くことで「戦争協力」した、というのが通説だった。ところが、彼の学生時代の詩篇・論文を見ると、冷静な態度で事変に処する一知識人の姿が浮かんでくる。

散逸し、歴史の底に埋もれつつある資料を、いまこそ調査し、翻刻し、世に残さねばならないと私は考えた。またそのことは、深い社会的意義を有するものと思われた。

戦後詩は、敗戦トラウマと死者への想いから生れたものと考えられてきた。荒地派が読解されるとき、戦争体験にふれられることが多いのは、そのためである。

荒地派が敗戦の傷痕から立ち上がったこと、その営為が戦後日本の詩的核心となったことの意義は、いくら強調しても足りない。一方、その傷口は決して一様ではなかった。従軍経験のある鮎川信夫・田村隆一らと、結核のため内地にいた中桐雅夫・三好豊一郎は、戦後においてもわかりあうことはなかった。軍隊経験のない吉本隆明は、荒地派のなかでも異端的存在だった。そのため吉本は、後に「戦後詩の体験の終結」(「戦後詩の体験」) = 「荒地」の終わりを宣言することになるのである。

荒地派について、戦争とそのトラウマから語ってゆくことは、重要な側面を見落とすことにもなりかねない。先述のように、未発表資料・単行本未収録資料も多いのであるから、なおさらである。

私たちは、未だ戦後詩の「正史」を語る位置に辿りついていない。私たちの「戦後詩」は、何処から始まったのか。それはどのような主題を抱えていたのか。それは、いまを生きる私たちに何を語っているのか。こうした重要な問いに、答える場所にすら、私たちはいないのではないか。荒地派の未発表資料の収集と、その歴史的意義の解明をとおして、私たちは問いの前に立たねばならない。

2017年に木原孝一の未発表小説「無名戦士(硫黄島)」を翻刻した際は、原稿用紙の劣化に悩まされた。早めに資料を発見・翻刻しなければ、物理的に解読できない、ということにもなりかねない。こうした危機感も、本研究を推進する原動力となった。

実際、本研究をとおして入手した飯島宗享の小説「ガラスの家」や、中桐雅夫の初期詩篇・論文は、いずれも原稿や雑誌の劣化が著しく、いま翻刻していなければ、全体像の再現は不可能だったろうと思われるほどであった(一部は虫食い等ですでに欠落していたため、遺族の協力を得て復元した)。

荒地派を初めとする戦後詩の未発表・単行本未収録資料を収集・翻刻すること。それら未知の作品を研究・創作の両面から取り上げること。それは、荒地派の全体像を解明するのみならず、我が国の戦争体験の本質を探り出すことにもなると考えられた。

以上が、本研究の開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大別してつぎの三点である。

(1) 荒地派を初めとする戦後詩の資料を収集し、翻刻して世に残すこと。

本研究の課題名に掲げた「荒地派の歴史的意義の解明」を成し遂げるには、同じく課題名にあげた「未発表作品の収集」が必要不可欠である。中桐雅夫の戦時の動向、鈴木喜緑の荒地詩人賞受賞後の足跡、鮎川信夫の父の信仰等々、手つかずの問題は多い。それらを一つ一つひも解かない限り、荒地派の全体像も見えてこないだろう。

『黒田三郎著作集』等、誤字脱字が多く、表記の変化も辿られていない全集・著作集も数多い。この状況を打破するためにも、一次資料の収集と研究が必要なのである。

戦中・戦後の激動のさなかで一度失われた資料を探し、あらためて歴史に刻むこと。そして、戦後詩研究の前提を作り直すこと。これが本研究の第一の目的である。

(2) 上記の資料をもとに、論文・作品を執筆し、戦後文学の新たな側面を照らし出すこと。

拙著『血のいろの降る雪 木原孝一アンソロジー』(2017年5月、未知谷)、『よみがえる荒地戦後詩・歴史の彼方・美の終局』(2020年6月、未知谷)のいずれも、手に入った資料すべてを用いて執筆した。だが上述のとおり、新発見資料は多く、さらなる論文を執筆する必要に迫られた。

考察の対象とされてこなかった未発表・未刊行作品を、詩史のなかに位置づけること。いままでの研究の延長上にありながら、新たな発展をもたらす論文を書くこと。これが本研究の第二の目的である。

(3)戦後詩にあらわれた「実存」のかたちを、同時代的にとらえなおし、私たちの生の原点を再発見すること。

先人の言葉を翻刻するだけなら、「古記録」にすぎない。それが「古典」であるためには、古典と向き合う現代人の情熱が不可欠である。

本研究が学術的意義を超え、広く社会的意義をも有するには、単に資料を翻刻・復刻するだけでは足りないだろう。荒地派の言葉を、私たちの「生」の原点として読み直さなければならない、と私は考えたのである。

詩人・粕谷栄市はエッセイ「『戦後詩と死』ノート」に、「私たちの「戦後詩」は、「戦前詩」の延長の上であり、私たちの今日の現代詩と呼ばれるものは、「戦後詩」の延長の上にある」と書いている。粕谷はここで、現代詩の歴史性を語っている。戦前を知らずして戦後詩はないし、戦後を知らずして現代詩はない、と主張しているのである。

本研究は、「戦後詩」のかたちを明らかにするだけでなく、その「延長の上」に「現代」を見渡そうとした。荒地派の営為を再現するだけでなく、それが私たちの生にいかにかに寄与しうるかを、問いかけたのである。

すなわち本研究は、荒地派を歴史的遺物としてではなく、私たちの精神的原点としてとらえなおそうとした。荒地派は、すべての価値観が崩壊した「無」から歩みだした。その営為は、コロナ禍による価値観の変容の只中にある私たちに、深いヒントをあたえていると考えられたのである。これが本研究の第三の目的である。

以上の三点を総合すると、本研究の最終的な目的は、我が国の「戦前」「戦争」「戦後」の正体を解明することにあつたと言えよう。

荒地派は、「技術」より「経験」を重視する詩的態度を打ち出した(鮎川信夫「現代詩とは何か」等)。戦前は北園克衛・富士原清一らの詩的モダニズムの影響を一身に浴び、戦時はあるいは抵抗し、あるいは諦めて戦地に向かい、戦後は新しい「日本」のかたちに違和を感じつつ、その時々々の想いを詩的象徴として描きつづけた荒地派の営為には、我が国のかたちを明らかにするためのヒントがある。

本研究は、(1)戦後詩の資料を収集・翻刻し、(2)それをもとに論文・作品を執筆し、(3)それによって私たちの生の原点を発見しようとした。後述のように、この目的は十分に達成されたといえることができる。

3. 研究の方法

本研究の方法は、大別してつぎの二点である。

(1)日本大学芸術学部(日藝)の卒業生・学生とともに「実存文学研究会」を結成し、研究活動、資料収集・翻刻、創作合評等を展開。

日藝の卒業生・学生を結集し、学術組織「実存文学研究会」を結成した。現メンバーは、山下洪文・中田凱也・舟橋令偉・内藤翼・正村真一郎・加藤佑奈・島畑まこと・田口愛理・古川慧成の九名である。資料の収集法、インタビューの仕方、翻刻の方法、校正の基本等を教え、隔週で研究報告・創作合評をおこない、教育と研究の両立を目指した。

中田凱也(現在、日本大学豊山中学校・高等学校講師)は鈴木喜緑の晩年のすがたを明らかにし、舟橋令偉(現在、日本大学大学院博士前期課程文芸学専攻在籍)は菅谷規矩雄の未発表原稿を入手するなど、各人が研究者として成長したことで、本研究は質的に飛躍することができた。

私たちは荒地派についての研究論文を書くだけでなく、感性的側面からの解説としての創作も試みた。荒地派の総体を把握するには、彼らの方法を学び、彼らの言葉を用いて「現代」を描くことが必要だからである。

荒地派の作品を歴史的遺物でなく、いままさに私たちの帰るべき原点として把握するために、絶えず学生と対話しながら研究を進める方法をとった。

具体的な研究方法を、幾つか挙げる。

飯島宗享の遺族と連絡を取り、遺稿(原稿用紙約300枚、スクラップブック二冊)を借り受けて翻刻。

飯島宗享の遺族や菅谷規矩雄の関係者に、回想録の執筆を依頼。

各地図書館で同人誌を調査し、鈴木喜緑が最後に住んでいた地を特定。研究会員とともに実地調査。

中桐雅夫の母校・日本大学芸術学部の所沢校舎を訪れ、当時の同人誌を調査。初期詩篇・論文

を入手して翻刻。

菅谷規矩雄の関係者と連絡を取り、遺稿を入手して翻刻。

得られた資料について、研究会で討議を重ね、論文を執筆。

あくまで一例であるが、おおむねこのような道程で(2)へつなげていった。

(2)上記により得られた成果を、学術叢書『実存文学』(山下洪文監修、2022年2月、未知谷)、『実存文学』(山下洪文監修、2023年2月、未知谷)として刊行。

入手した資料のほとんどは劣化が激しく、近い将来、判読不能となる恐れがあった。そこでそれらを翻刻し、その歴史的意義を考察する論文・作品を付して、非売品の書籍としてまとめた。二冊は、『図書新聞』『現代詩手帖』等で好意的に紹介された。

実存文学研究会公式サイトでも、一部作品・資料を公開している。

(1)は研究・教育の、(2)は社会的還元の効果を狙ったものである。それらがいずれも妥当なものであったことは、「4.研究成果」の項目により証明されると考える。

4.研究成果

学術叢書『実存文学』二冊を監修し、それに論文・作品を多数掲載した(本項目の「(1)書籍」並びに「5.主な発表論文等」参照)。また、本研究に関連する論文・作品を複数発表した(本項目の「(2)論文・作品」参照)。

(1)書籍

日藝の卒業生・学生と結成した「実存文学研究会」を軸に、文学史的に重要な数々の未発表作品を翻刻し、その意義を解明する論文・作品を執筆した。以下、その主な研究成果を述べる。

実存主義哲学者・飯島宗享(東洋大学文学部長等を歴任)の未発表小説を、手書き原稿から翻刻。

飯島のスクラップブック二冊(1957年から87年にかけて書かれた、論文・書評・エッセイ等の切り抜き)を遺族より借り受け、翻刻。

飯島の遺族に、回想録の執筆を依頼。生涯、人となり、業績等についての肉親の貴重な証言を得る。

飯島の遺族から、アルバム写真を借り受ける。そのなかには、学徒動員の際の寄せ書きなど、学生時代の思想的動向を示す貴重な資料もあった。それらを「飯島宗享アルバム」と題し、見やすく整理・編纂した。

吉本隆明と並び称されながら歴史の表舞台から消えた詩人・鈴木喜緑の足跡を調査し、数々の新事実を発見(晩年の生活等)。

喜緑の肖像写真等、貴重な資料を入手。

喜緑の詩集及び単行本未収録詩篇・エッセイを収集・翻刻。

荒地派の詩人・中桐雅夫(『荒地』の創始者の一人)の全集未収録作品を、戦前・戦中の同人誌から翻刻。

60年代最大の詩人・菅谷規矩雄が訳したビューヒナー「ダントンの死」の手書き原稿を、関係者から借り受けて翻刻。

菅谷規矩雄の関係者に、回想録の執筆を依頼。教員として名古屋大学につとめていた時期の菅谷の動向が、これで明らかとなった。

飯島・中桐・菅谷の文学的エッセンスをまとめ、書評を付す。

飯島・中桐・菅谷の生涯を詳しく調べ、略年譜を作成。

藤田一美先生(東京大学名誉教授)に、「実存」の本質を示す論文の執筆を依頼。荒地派が希求した「実存」の始まりから終りまでを辿る論は、荒地派の歴史的位置を明らかにする十分な威力を持っていた。

上記資料をもとに、荒地派及び彼らに影響をあたえた実存主義文学・哲学に関する研究論文と、感性的側面からの解説としての作品を執筆した。

以上をまとめたものが、『実存文学』『実存文学』(山下洪文監修、2022~2023年、未知谷)である。数々の新発見資料に、日藝の卒業生・学生による論文・作品を掲載し、第一巻は776頁、第二巻は768頁の大著となった。

『実存文学』は、飯島宗享・鈴木喜緑の二大特集を組んだ。飯島の手書き原稿約300枚を、遺族の協力を得て翻刻し、また現在手に入れることがほとんど不可能な喜緑の詩篇を翻刻し、二人の作品と生涯を現在によりみえさせた。また、それらの意義を明らかにする論文・作品を多数付した。

『実存文学』は、中桐雅夫・菅谷規矩雄の二大特集を組んだ。中桐の初期詩篇・論文や、菅谷が上演を期して訳した「ダントンの死」の断片など、いずれも貴重な資料を翻刻・掲載した。また、『実存文学』刊行後に発見された飯島宗享のスクラップブック二冊も翻刻し、併せて掲載した。前号に引き続き、論文・作品も多数掲載した。

二冊において、関係者への取材や詳細な年譜の作成等、今後の戦後文学研究の礎たりうる地道な仕事にも取り組んだ。

(2)論文・作品

『実存文学』『実存文学』に掲載された論文・作品以外の研究成果について、以下に述べる。

「山下洪文監修『実存文学』(未知谷)刊行に寄せて」(『図書新聞』第3582号)は、実存文学研究会の活動をわかりやすくまとめたものである。当会の存在意義を、広く読者に知ってもらうため書かれた。

「あなたという名の傷痕へ 鮎川信夫と森川義信」(『日本大学芸術学部芸術研究所紀要』第120号)は、鮎川信夫が親友の森川義信を「あなた」と呼んで歌った理由を、二人の生涯、またその青春を決定づけたトーマス・マン『魔の山』の読解をとおして跡づけた論文である。戦後詩における「あなた」の正体のみならず、人はなぜ「あなた」を歌うのか、そもそも詩における「あなた」とは誰なのか、という根源的問いに答えようとした。本稿は、戦後詩の発生理由を、戦争トラウマではなく、存在しない「あなた」への祈りという観点からとらえなおそうとした。そこには、荒地派の「あなた」像を解明することで、「いま詩を書くこと」の意味を深めようという意図があった。

「黒い太陽の瞳 楠田一郎論」(『藝文攷』第28号)は、荒地派に決定的影響をあたえた詩人・楠田一郎の生涯を辿り、晩年に彼の作風が一変した理由を解き明かした論文である。死の直前まで書き継がれた代表作「黒い歌」を、それ以前に書かれたモダニズム詩群と比較検討し、楠田の変化が「突然変異」(飯島耕一「楠田一郎の「黒い歌」の意義」)ではなく、必然的に導かれたものだったことを明らかにした。

「祝祭と奈落 大岡信『記憶と現在』について」(『日本大学芸術学部芸術研究所紀要』第119号)は、荒地派の好敵手である詩人・批評家の大岡信の詩意識を批判的に分析することで、荒地派の歴史的意義を浮かび上がらせようとした論文である。大岡が告げた「感受性の祝祭」の空虚性を指摘し、現代詩人が選ぶべき道は、限界状況を言葉のなかに再現し、「荒地」を再帰させることであると論じた。

「「神」の裂け目 ゲオルク・トラークル「破滅」について」(『藝文攷』第27号)は、ドイツ表現主義における「神の死」の意味を探ることで、荒地派及び実存主義の本質を照らし出すようとした論文である。トラークルは妹・グレーテを「神」とすることで、「神の死」後の地上を生き抜こうとした。その詩的態度はハイデッガーから厳しい批判を受けたが、神を喪失したヨーロッパと、生きる意味を失った己を重ね合わせた詩風は、現代をも貫く衝動力を有している。ドイツ表現主義が直面した「神の死」と、荒地派の敗戦体験は、実存的に響き合っている。トラークルの「神」とその喪失のありさまを明らかにすることで、荒地派の喪失意識もまた浮き彫りにされるのである。

「日藝文芸学科の詩の授業 「詩歌論」「現代詩研究」の歴史」(『江古田文学』第41巻・第2号)は、「詩の教育」という観点から、詩歌の存在意義、文学教育の現在を考究した論文である。神保光太郎や福島泰樹が担当していた「詩歌論」「現代詩研究」といった授業が、いかなる変遷を経て受け継がれてきたかを、当時の資料をもとに跡づけた。学生たちの作品をふんだんに掲載することで、詩意識の「いま」をも照らし出す一文とした。

「近代思想論序説(日本篇) 戦争・空白・再生」(『えこし通信』第27号)は、戦後文学・思想の流れを辿ることで、荒地派の実存的詩風の意義を明らかにした論文である。鮎川信夫・吉本隆明らを、一詩人としてのみならず、「いま」を生きるための言葉を紡いだ思想家として読み解いた。

「荒地への旅～復刻・戦後詩の名作～」三・四・五回(『江古田文学』第41巻・第1号～第41巻・第3号)は、未発表原稿を初めとする歴史的資料を掲載するとともに、荒地派の詩人の生涯と作品を解説し、人々に広く伝える役割を果たした。第三・四回は、木原孝一が生涯書き継いだ小説「無名戦士(硫黄島)」の単行本未収録部分を、第五回は単行本未収録詩篇のアンソロジーを掲載し、解説を付した。

上述のとおり、荒地派の総体を把握するため、彼らの方法を学び、彼らの言葉を用いて詩篇を執筆し、公表した。「おいで、嵐よ」(『えこし通信』第26号)「あやめ」(『キリツボ』第27号)「神の歌」(『日本大学芸術学部芸術研究所紀要』第119号)「断崖」(『キリツボ』第28号)「遺跡」(『日本大学芸術学部芸術研究所紀要』第120号)がそれである。

上記のうち、「あなたという名の傷痕へ」「黒い太陽の瞳」「祝祭と奈落」「神」の裂け目」が査読付き論文であり、「遺跡」「神の歌」が審査付き作品である。

(3)その他

実存文学研究会公式サイト (<https://www.jitsuzonbungaku.com>) で、作品・資料を公開している。

日本大学芸術学部文芸学科公式サイト (<https://www.nichigei-bungei.info/course/teacher/kobun-yamashita/>) でも、一部作品を公開している。

以上のように、本研究は日本文学史の新たな側面を照らし出すとともに、その前進に寄与している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計32件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 120
2. 論文標題 あなたという名の傷痕へ 鮎川信夫と森川義信	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部芸術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 3582
2. 論文標題 山下洪文監修『実存文学』（未知谷）刊行に寄せて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 8-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文, 飯島宗享, 飯島徹, 中田凱也, 舟橋令偉, 佐藤希, 海老沢優, 桑島花佳, 内藤翼, 正村真一郎, 加藤佑奈, 島畑まこと, 田口愛理, 湯沢拓海, 古川慧成	4. 巻 2
2. 論文標題 飯島宗享のスクラップブック	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 549-758
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 2
2. 論文標題 本資料について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 544-548
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 2
2. 論文標題 菅谷規矩雄略年譜	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 394-400
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 2
2. 論文標題 言葉の「死後」を生きるということ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 238-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文, 菅谷規矩雄, 中田凱也, 正村真一朗, 西巻聡一郎, 古川慧成	4. 巻 2
2. 論文標題 菅谷規矩雄エッセンス&入門	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 212-237
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文, ゲオルク・ビューヒナー, 菅谷規矩雄, 中田凱也, 舟橋令偉, 佐藤希, 島畑まこと	4. 巻 2
2. 論文標題 ビューヒナー「ダントンの死」菅谷規矩雄訳	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 197-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 2
2. 論文標題 菅谷規矩雄について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 186-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 2
2. 論文標題 中桐雅夫略年譜	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 178-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 2
2. 論文標題 失われた死を求めて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 65-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文, 中桐雅夫, 中田凱也, 舟橋令偉, 佐藤希, 海老沢優, 西巻聡一郎	4. 巻 2
2. 論文標題 中桐雅夫エッセンス&入門	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 37-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文, 中桐雅夫	4. 巻 2
2. 論文標題 中桐雅夫初期詩篇・論文	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 2
2. 論文標題 中桐雅夫について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 10-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 28
2. 論文標題 黒い太陽の瞳 楠田一郎論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 藝文攷	6. 最初と最後の頁 94-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 41(3)
2. 論文標題 荒地への旅～復刻・戦後詩の名作 木原孝一単行本未収録詩抄～	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 江古田文学	6. 最初と最後の頁 398-415
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 119
2. 論文標題 祝祭と奈落 大岡信『記憶と現在』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部芸術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 28-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57544/nichigei.1.0_28	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 1
2. 論文標題 鈴木喜緑について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 592-600
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 1
2. 論文標題 近代思想論序説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 576-590
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 1
2. 論文標題 実存主義は滅びず	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 267-292
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 1
2. 論文標題 飯島宗享について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文, 鈴木喜緑, 中田凱也, 舟橋令偉, 桑島花佳, 内藤翼, 正村真一朗, 加藤佑奈, 島畑まこと, 田口愛理	4. 巻 1
2. 論文標題 鈴木喜緑全詩	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 602-722
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 1
2. 論文標題 鈴木喜緑アルバム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 601-601
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 1
2. 論文標題 飯島宗享略年譜	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 317-320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文, 飯島宗享, 桑島花佳, 正村真一朗, 島畑まこと, 田口愛理	4. 巻 1
2. 論文標題 飯島宗享エッセンス&入門	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 240-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文, 飯島宗享, 飯島徹, 中田凱也, 舟橋令偉, 桑島花佳, 内藤翼, 正村真一朗, 加藤佑奈, 島畑まこと, 田口愛理	4. 巻 1
2. 論文標題 飯島宗享「ガラスの家」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 58-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 1
2. 論文標題 飯島宗享アルバム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実存文学	6. 最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 27
2. 論文標題 「神」の裂け目 ゲオルク・トラークル「破滅」について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 藝文攷	6. 最初と最後の頁 90-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 41(2)
2. 論文標題 日藝文芸学科の詩の授業 「詩歌論」「現代詩研究」の歴史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 江古田文学	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 41(2)
2. 論文標題 荒地への旅～復刻・戦後詩の名作 木原孝一「無名戦士(硫黄島)」(下)～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 江古田文学	6. 最初と最後の頁 291-308
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 26
2. 論文標題 近代思想論序説(日本篇) 戦争・空白・再生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 えこし通信	6. 最初と最後の頁 40-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山下洪文	4. 巻 41(1)
2. 論文標題 荒地への旅～復刻・戦後詩の名作 木原孝一「無名戦士(硫黄島)」(上)～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 江古田文学	6. 最初と最後の頁 192-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山下洪文	4. 発行年 2023年
2. 出版社 未知谷	5. 総ページ数 768
3. 書名 実存文学	

1. 著者名 山下洪文	4. 発行年 2022年
2. 出版社 未知谷	5. 総ページ数 776
3. 書名 実存文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

実存文学研究会公式サイト https://www.jitsuzonbungaku.com 日本大学芸術学部文芸学科公式サイト（教員紹介ページ） https://www.nichigei-bungei.info/course/teacher/kobun-yamashita/
--

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------